

---

# ココロ・プログラム

断歩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ココロ・プログラム

### 【Nコード】

N3719BA

### 【作者名】

断歩

### 【あらすじ】

進んだ科学技術は、我が身を滅ぼす。  
その言葉の通りに、  
人類は凶悪なウイルスを開発した。  
けれど、実験の失敗でウイルスは外に漏れだしてしまう。  
その結果、人類のほとんどは死滅した。

一人の天才科学者は、孤独の中に何を想うのか？

未来に残すべきものは、DNAだけなのか？

奇跡的な出来映えのロボットは、考える。

ココロとは何か。

一人が辛いのは、何故なのか。

今、ロボットが奇跡を起こす。

## 奇跡の誕生

ここには、都市があった。

進み過ぎた科学は自らを滅ぼす。

まさに、その通りだった。

そこは最新科学技術が作り出した新素材によって、その都市のほとんどは銀色に染まっていた。

ロボットは当たり前で、家事炊事をするロボット、掃除をするロボット、介護をするロボットなどたくさんのロボットがそこにいる。しかし、人間または人間にもっとも近いロボットは創り出せなかった。

ある日、人々は凶悪なウイルスを生み出した。そして、問題が起きた。

ウイルスが漏れ出したのだ。

漏れ出したウイルスは世界中に広がり、地球の人類のほとんど、生物のほとんどが死滅した。

ある滅びた都市に、二人の科学者夫妻はウイルスの脅威から逃れ、生き残っている。

彼らは遺伝子操作によって天才の我が子を創りだした。二人の子は、夫妻にとても愛され、大切に育てられていた。

しかし、彼が十六歳になるときに、彼の両親である科学者夫妻は、病によって亡くなり、彼は孤独になった。

滅びて、苔やツタなどに覆われた都市の中で一人。

高台から見渡す限り緑が生い茂る、この世界を一人で生きていくことになった。

このとき彼は孤独の痛みを、孤独である苦しみを知った。

そして、彼は自分のそばにいてくれるロボットを創り始めた。

十数年後、孤独な科学者はロボットを創った。

システムは完璧、見た目は人間の少女と見分けがつかない。  
あえて出来映えを言うなら、奇跡。

「よし、あとはロボットを起動するだけだ。」

ボクはロボットの起動スイッチを慎重に押した。  
バチバチイという音とともに、火花と青白い閃光が出る。  
しばらくすると、火花と青白い閃光は治まった。

「成功したのかな？」

ボクはロボットの傍に近よる。

『システムの正常な起動を確認シマシタ』

ロボットは目を閉じたまま言う。

ボクがホツと安堵の息を漏らしていると、ロボットはゆっくりと目を開いた。

「初めまして、ボクは君を創った、博士だよ。」

ボクは嬉しくてたまらなかった。

『ハ、力、セ？』

このロボットは人のように記憶を持ち、自ら学習をし、考えるロボットだ。

しかし、まだ起動したばかりで、思考があまり働いていないようだった。

『ハカセ、ナゼ泣いているのですか？』

ロボットは首をかしげていた。ボクは彼女に言われるまで、涙を流していることに気が付かなかった。

「大丈夫だよ。それよりも君の名前はもう決まっているんだ。」

『ナ、マ、エ？』

「そう、名前。君の名前はリオ。」

ボクはロボットに名前を付ける。なにせ唯一の家族なんだから。

「リ、オ？……ワタシの、ナマエ？」

リオはまだ理解できていなかったが、ボクはリオを抱きしめ、彼女の耳元で囁いた。「そう、君の名前はリオだよ。」

「リオ。ワタシの、名前。」

ただ、ただ嬉しくて……ボクは彼女を抱きしめた。  
だって

ボクは孤独ではなくなったのだから。

## 博士の歌（前書き）

感想をお願いします

## 博士の歌

孤独な科学者はロボットを創った。

システムは完ぺき、見た目は人間の少女と見分けがつかない。

あえて出来映えを言うなら、奇跡。

だが、まだ完成していない。

一つだけできない。

それはココロという

### プログラム

奇跡のロボット、リオが誕生してから一カ月が過ぎた。

目覚まし時計のアラームが聞こえる。

まだ眠いのでボクは腕だけで、乱暴にアラームを止める。

そして、また眠りについた。

しばらくすると、誰かがボクの体を揺さぶっていることに気が付いた。

『博士、起きてください。』

ああ、リオが起こしに来てくれたのか。

「リオ…もう少しだけ寝させて…」

ボクはもう一度眠ろうとする。

『コーヒーが冷めマスよ。』とリオは続けて言った。

コーヒーを淹れてきてくれたのか。せっかく淹れてきてくれたのだから、飲まないでリオに申し訳ないな。

「おはよう、リオ。」

ボクは眼鏡をかけ、立ち上がった。

『おはようゴザイマス、博士。コーヒーを持って来マスね』

リオはトテトテと小走りで、ボクの机に置いてあるコーヒーを取りに行った。

「ふあゝ、よく寝た。」

『博士、どうぞ。』



ボクが背伸びをしていると、リオがお盆にのせたコーヒーを差し出してくれた。

「ありがとう。いただくね。」

うつ、少しぬるくなってしまうているな。やはり、きちんと起きるべきだった。

でも、リオはコーヒーを淹れるのが上手だな……。まあ、そういうデータが入っているからか。

「うん、おいしいよ。」

「ありがとうゴザイマス。アノ、博士。机の上に置いてあるのは、何デスカ？」

突然リオが指さす所には、何冊か冊子が重ねて置いてあった。

「あれには、歌が書いてあるんだ。」

「ウ、タ？」

「そう、歌。昨日の夜にやっと完成したんだ。」

「博士が、作ったウタ？」

「そうだよ。それじゃあ、隣の部屋で練習を始めようか？」

「ハイ、博士。」

そして、今日からリオに歌を教え始めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3719ba/>

---

ココロ・プログラム

2012年1月10日22時48分発行